

《論 文》

「経験」(Erfahrung)の道程から捉え直す自己形成試論

—ハイデガーのヘーゲル解釈などをもとにして—

佐藤光友

1. はじめに

この論稿は、ハイデガーによるヘーゲルの『精神現象学』(Phänomenologie des Geistes)「緒論」(Einleitung)についての経験概念の解釈などを手掛かりに、児童・生徒の自己形成に関わる「経験」(Erfahrung)の道程を、道德教育の実践的な事項に照らしながら存在論的に探究しようとする試みである¹⁾。自らを形作っていく意識「経験」—学ぶことにより真なる対象に出会う「経験」—の可能性として存在する自己の形成プロセスを、「特別の教科 道德」における内容項目「真理の探究」(中・道2018/34-35)²⁾などの事例と対峙させることによって、難解な哲学的事項をより具体的に論究することを心がけた。児童・生徒が自らを形成していく過程と、真理を大切に、真理を探究することが、深く通底しているということを論じることによって、道德の内容項目「真理の探究」の人間形成的意義を解き明かしてみたい。

自己形成論としての「経験」の道程についての先行研究としては、例えば、高橋勝の著述などを挙げることができる³⁾。高橋は、ハイデガーの『ヘーゲルの経験概念』(Hegels Begriff der Erfahrung, in: Holzwege.)を解釈しながら、ハイデガーにとっての「経験」が、「意識に新しい真なる対象」を発現させるものとして、それまで自らの対面にあった対象に「手を伸ばすこと」を意味するという⁴⁾。「経験の決定的な本質契機は、経験においては意識にとって新しい真なる対象が発現するという点に存する。重要なのは、新しい対象の成立することが真理の成立することとしてであるという点であって、ある対象が対向するものとして心に留められるということではない。対象は今や表象することに対向するものとしてはもはや全く考えられておらず、まだ真ならざる対象という意味での古い対象に向かって、意識の真理として成立するところのものとして、考えられるべきである。」(Heidegger.GA.5.185)

このハイデガーの『ヘーゲルの経験概念』の言葉を援用し、「経験」は、新たな対象とその意味を引き立て、開示することにより、言わば、自己の生活地平そのものを現出せしめるのであるということに言及する高橋にとって、「経験」とは新しい地平を獲得して、世界(Welt)という意味が生起する母体である⁵⁾。「経験することとは、意識が、それがあつた限りにおいて、この意識が真理においてそれとしてあつたところの己れ概念に向かって出かけていく仕方なのである。出かけながら手を伸ばすことは、現れ出でつつある真なるものの中で真理の現れ出ることを手に届かせる。」(Heidegger.GA.5.185)

このようなハイデガーの解釈するヘーゲルの経験概念から自己形成をもたらさうとするプロセスとしての「経験」の道程を考察することは、児童・生徒が真理を探究し新たな知の地平を切り

開く契機となりうるものであり、意識の自己形成過程を捉えていく手掛かりになると考える。

2. 自己形成の過程、意識の「経験」と間主観性

前述した「経験すること」(Erfahren)が、出かけながら手を伸ばすことであり、現れ出でつつある真なるものの中で真理の現れ出ることを手に届かせることであるという、ハイデガーのヘーゲル解釈による見識を、「学び教える」関係性に還元するならば、学ぶことへと手を伸ばそうとする児童・生徒と、その児童・生徒を現前するもの(新たに出会う学問知)へと引っ張っていく、誘っていく教師との自己意識相互の交流にも見て取ることができるであろう。

ヘーゲル『精神現象学』に詳しいボンジーベンは、自己意識相互の交流について次のように述べている。「まだ欠けていたところの、概念と対象との内容的な一致は、諸々の自己意識相互間の間主観性(Intersubjektivität)において可能となる⁶⁾」。

例えば、道徳授業において、特に「どうして? なぜ? どのように?」という発問を教師が児童・生徒に投げかけることから始まって、児童・生徒と教師双方が真理を求め、真理探究のための知に立ち向かっていく姿勢を持つことができたならば、教師と児童・生徒それぞれ異なった意識ではなく、真理に向かう共通の意識としての間主観性として響き合うということ、また、共鳴し合うということの可能性をそのとき双方が感じるであろう⁷⁾。生徒のみならず、児童、特に小学校高学年からは、真理を求める態度を大切に、物事の本質を見極めようとする知的な活動を通して興味や関心を刺激し、探究する意欲を喚起させること(中・道2018/35)が教師に求められている。児童・生徒が真理を探究することに興味関心を持つためには、まずもって、教師自らが好奇心をもって真理を探究しようとする姿勢(意識)を持たなければならない。その教師の日々の姿勢(意識)が児童・生徒の真理を探究しようとする意識を目覚めさせる。すなわち、教師の意識が生徒の意識双方のものとして了解し得ること、すなわち双方の意識は間主観性をともなって響き合い共鳴し合うということである。

そして、限定されていた児童・生徒たちの自然的意識(自然のままの素朴な意識)は、自らの殻を突き破って、哲学へと、その真なるものの現実的な認識へとそのパースペクティブの視野を広げていく。ボンジーベンの自然的意識についての解釈によると、「自然的意識は、ひとつのものにおける多様な特性の知覚へと移行せざるを得ない」という。(Bonsiepen. 1977/68-69)児童・生徒の意識がある対象(例えば学習内容)に対して取る態度が変わらなければ、現れ出る知、すなわち、自然的意識が実在的な知(真の知)へと展開していく素地は見いだせないが、学習に必要な哲学的知を教師自身が求めようとする意識がなければ、児童・生徒の「経験」は学的行程にまで高められることもない。

「意識が対象に対して取る態度が変化するということを、ヘーゲルは意識の反転として理解したのであるが、このような反転を、意識はただ部分的にしか行い得ないのである。それゆえに、その際どうしても『我々』による手助けが必要であり、『我々』のこの助力によって意識の一連の経験は『学的行程』にまで高められるのである。」(Bonsiepen. 1977/69)

それゆえに、現れ出る知(現象知)を叙述する者、標示する者と、その者と共に真理に向かう共通の意識としての間主観性として響き合う、また、共鳴し合うときの教師・児童・生徒して

の我々⁸⁾と、児童・生徒の中に眠る「自我」とがともに知識を求めることによって、相互に深い一致、信頼関係が築かれるのである。

3. 「経験」の道程と自己吟味の道程

間主観性として共鳴し合うときの我々は、意識の外部にあって、意識と対立しているものではない。しかしながら、我々は、意識の内部に留まりながらも、自己が真理だと思い込んでいた知が真理でないということの自覚を促す。フィンクが述べているように、我々は、意識の内にて自己吟味の行程を見つめる(Fink. 1977/56)のである。自己形成過程においては、例えば、道徳授業での学びの「経験」として、児童・生徒たちにとって、真理について内容項目で示されたことを共通理解できた、その項目の真理が把握できたと思えたとしても、やはり、真理探究は、その後も続いていく。なぜならば、児童・生徒たちが把握できたことにとどまっていたならば、もう「経験」のプロセスは完了してしまうのであり、それ以上の発展的な自己形成は望めなくなるからである。

「真理の探究」という内容項目が、自分たちの知識として定着したことを、授業の振り返りなどで確認することは大切であるが、そのことに満足してしまった瞬間、意識は自己の確信性を見失ってしまう。自分たちにとって、これが真理だと思い込んでいた、言わば、確信していたものが否定されていくということ、その「経験」が自己形成のプロセスにおいて重要なのである。この自己が自己であるという意識を失う否定の道程は、自分が思い込んでいた自己の外部のものを否定して、より高次の道程に向かっているという自己形成過程の証でもある。ただし、このことは、「真理の探究」という内容項目の内容それ自体を否定するものではなく、その内容が自分たちにとって、もうこれ以上考える必要がないという確信を否定するということを前提して議論を展開しなければならない。これらの事項については、後節で、意識の「経験」についての吟味(懐疑)の道程として論考を深めていくことにする。

「経験すること」における〈経る(進む・動く)こと(Fahren)〉は、〈引く(曳く・惹く・退く・挽く)こと(Ziehen)〉というもともとの意味を持っている(Heidegger.GA.5.185)。このことからとりわけ、「引く」ということに注目するならば、まさに教育(Erziehung)の語義 Ziehen(導く)という、教師が児童・生徒を誘い、真の知へと手を届かせる営みでもあるとも言えよう。現象知を叙述あるいは標示(Darstellung)する者は、真の知に迫る自然的意識の道程(der Weg des natürlichen Bewußtseims, das zum wahren Wissen dringt)(Ph.1927/67, 檜山1961/45)⁹⁾を意識するとき、その道程の叙述あるいは標示が可能となる。心が育つといった場合、児童・生徒の自律や責任感を育むためのプロセスにおいてはじめて自己が完全に自己自身を「経験」するのであり、自己自身において何であるのかを知ったときに自らがよりよく生きる意識へと純化される。自然的意識の道程が、「経験」の道程であり、「経験」の道程を歩むということは、「哲学という学の領域の中へと」(in den Bereich der Wissenschaft der Philosophie)案内していく(Heidegger.GA.5.142)ことなのである。このことを自己形成を齎す意識「経験」の道程として捉え直すならば、叙述ないしは標示は、学でない意識を学へと手引きすること、あるいは、「学の基礎づけ」(die Begründung der Wissenschaft)を児童・生徒に身に付けさせることの一連の教師の営みと解して

よいであろう。

では、児童・生徒たちは、「経験」の道程において、どのように自らの自然的意識を実在的(真の)知へと向かうことができるのであろうか。次にこのことについて考察する。

4. 自己形成の過程、自然的意識と現象する知の叙述(標示)

「経験」の道程において、児童・生徒たちの自己形成が学の場にまで高められるためには、そのことを可能ならしめる哲学が必要である。その哲学には、現実的認識にとりかかる前に、絶対者(自体そのもの、絶対的实在)を、自分のものとする「道具」(Werkzeug)、また絶対者を認識するための「手段」(Mittel)を理解しておく必要があるとする考えがある(Ph.1927/64, 樫山1961/43)。だが、この考え方には、認識と絶対者の間に、両者を分ける限界があるという確信がひそんでいる。その理由は、もしも認識が、絶対的实在を自分のものとする道具であれば、道具をある物に適用するとき物はもはやもとのままのものではなく、変更されることになるからである。(Ph.1927/64, 樫山1961/43)。認識は真理の光を通す媒体(Medium)だとしても、認識によって与えられたものは、真理それ自体ではなく、やはり媒体を通した真理に他ならない。すなわち、この場合、媒体を吟味すれば、光線屈折の法則を得ることができるが、結果からこの光線屈折を差し引けば、状況は道具と考える場合と同じになってしまうということである。

認識は認識されるべき「自体」(Ansich)にびたりと到達することはできない(W.Marx2006/28)¹⁰⁾。

今ここで問題なのは、光線の屈折という現象ではなく、光そのものをどう捉えるかである。この考え方においては、現象と光そのものという、一方に認識を置いて、他方に絶対者をおくことで、両者の間にはっきりした限界を見出しうる(樫山1961/44)ということが示唆されている。このことから真理の光と光線の屈折の法則両者の関係は、真理探究を内容項目として定めた道徳教育の立場からは、「よく生きるための道理」と「よく生きるための方法・法則・習慣」との関係として置き換えて論究することも可能であろう。よりよく生きること、真理とは、「誰も否定することができない普遍的で妥当性のある物事の筋道、道理を指している」(小・道2018/38)。それゆえ、「経験」の道程において、真理を大切に、真理を探究することがまずあって、学校生活を工夫して生きるための方法や習慣などの心が育まれていくと考えられる。このことは、ハイデガーのいう差し当たっては、自然的意識と実在的(真の)知との間の区別を見通すことが肝要であるということ(Heidegger.GA.5.144)に通じるであろう。

「叙述(標示)は、自然的な表象することを意識の諸形態の博物館の内部で案内して回り、視察の最後に特別の出入口を通して絶対的な知の中へと去らせるということは、決してしない」(Heidegger.GA.5.142)。

すなわち、叙述の働きは、自然的意識を意識の各形態(各段階)において用意されている博物館に展示されているものを見て回り、それが終わったら、特設出口から去っていき、絶対知へと向かうというものではないということである。「むしろこの叙述(標示)はその第一歩からして、たとえさらにその第一歩以前からではないとしても、自然的意識に、この意識はその持前の上からいって初めからそもそも叙述(標示)に随伴する能力がないものであるとして、別れを

告げているのである。現れ出る知の叙述(標示)ということは、自然的意識が歩む行程では決してない」(Heidegger.GA.5.142)。

このことを自己形成過程における「経験」の道程として捉えるならば、例えば、道徳授業の学習(道徳の授業で教師が教科書あるいは読み物資料を範読するときに、児童・生徒がその内容〔物語〕の主人公の心情になる自我関与的な学習)の場合などにおいて、真理へと向かうために、現象知を叙述する哲学者、その哲学者に追隨する者としての教師と、その者に共鳴する児童・生徒が進む道程が、そのまま単純に絶対知に通じている「経験」の道程としてあるのではないこととして解釈できるであろう。あくまでも完全なものではない現象する知の叙述であるがゆえに、現象する知の叙述の対象は「現象知」とどまり、教師と児童・生徒とが真の知に迫っていく自然的意識の行く道ではない。すなわち、真なる知に迫っていく自然的意識の道程が、自らの叙述に沿った道にそのまま考えを深めることなしに単純に進むことでよしとしないということである。

「しかしまたこの叙述(標示)は、自然的意識から一步一步遠ざかって行って、その経過のどこかで絶対的な知の中へと通じるような道程では、断じてない。それにもかかわらず、この叙述(標示)はある道程である。それにもかかわらず、この叙述(標示)は、自然的意識と学との間を主宰しているある中間内部を絶え間なく往復するのである」(Heidegger.GA.5.142)。

だが、この叙述(標示)は、自然的意識から一步一步離れていって、その道程のどこかで絶対知と合流するといった単純なものではない。自然的意識と学との間にある中間を絶えず往復している。真実の知へと突き進んでいくその過程において、児童・生徒たちは、「経験」を積み重ねながら、あるときはうまくいったと言って喜び、またあるときは落胆する。道徳授業において、児童・生徒が物語の登場する主人公に自我関与していく学習の場合、教師が教科書あるいは読み物資料を範読するとき、言わば、児童・生徒が対象としての教材内容に向かうとき、自然的意識が対象に向かうという、ある種の「志向性」(Intentionalität)が働いている¹¹⁾といってよいであろう。児童・生徒の素朴な自然的意識が、非反省的意識として何の媒介もなく道徳教材に向かうとき、純粋に教材に登場する主人公の身に自己を置き、その教材の真に語られているものの意味内容を了解する。

ところで「考え、議論する」道徳といった場合、その「考え」を深めていくことと、「経験」の道程としての自然的意識とのかかわりとをどのように関連づけ、捉えればよいのであろうか。次はこのことについて論究する。

5. 「経験」の道程、自然的意識と「考え(思惑)」

ハイデガーは、「経験」の道程としての自然的意識の性格の一部を成しているものとして「表象された有るものに絶えず没入することだけでなく、同時にこの有るものを専ら真なるものと思い、従って自らの知を実在的な知とすること」(Heidegger.GA.5.149)を挙げている。表象されたものに絶えず没入するといった、この「表象すること」(das Vorstellen)とは、「考え(思惑)」(Meinen)が働くことであり、ハイデガーは、次の「考え(思惑)」(das Meinen)という語の意義を三つの「考え(思惑)」から捉えている。

一つ目が「…を直接目指すこととしての考え(思惑)」(das Meinen als das unmittelbare Sichrichten auf…),二つ目が「与えられているものを信頼しながら受け入れることとしての考え(思惑)」(das Meinen (minne) als das vertrauende Aufnehmen des Gegebenen.)であり、三つ目が「或るものを自己のものとして手離さずに主張することの意味での考え(思惑)」(das Meinen, etwas als das seine bei sich halten und behaupten.)である。ハイデガーは、これらの「考え(思惑)」こそ、「経験」の道程としての自然的意識がその中を動いている「表象すること」すべての根本体制であるという。それゆえに、自然的意識は、「考え(思惑)」という体系の中にはまり込んでいると指摘している(Heidegger.GA.5.149)が、このことを自己形成過程の観点から肯定的に捉え直すことはできないだろうか。

まず、一つ目の「考え(思惑)」を、例えば、道徳科内容項目「真理の探究」において、児童・生徒の自然的意識が、「真理そのものを直接目指すという考え」として捉えた場合を想定したならばどうであろう。というのも、例えば、後期ハイデガーにおいても、存在そのものは、存在者(存在しているもの)からは最終的には把握できないといった思惟に至るが、真理そのもの、ある意味で、具体的な事象から捉えることはできないということ、自然的意識は、おぼろげに了解していて、真理という直接的なものを目指すと言われているからである。

二つ目の「考え(思惑)」については、あらかじめ与えられた道徳資料(道徳の教科書等を含めた教材)を、児童・生徒たちは信頼しながら受け入れることにより、読み物資料に対して、自我関与的な学習(物語資料の主人公になったつもりで考える)などができるようになることとして解釈するならばどうであろう。この場合、児童・生徒たちは、資料そのものを信頼して読み込んでいくことで、あらためて問われている事柄をより発展的に考えることとして理解できないだろうか。

三つ目の「考え(思惑)」を、例えば、すでに学習した内容項目「真理の探究」について、児童・生徒一人一人が、自分のものとして手離さずに、その真理探究の内容を記憶にとどめておくことへの拘りとして捉えた場合はどうだろうか。この場合、道徳授業において、把握した内容項目を自分のものとして手離さずに記憶にとどめておくことは、グループ学習として話し合いがなされた際にも必要なことであろう。すなわち、理解を深めた内容項目の記憶から自らの考えを基点とすることで、柔軟に他者の話に耳を傾けて、物事を多面的・多角的に捉えることができるということである。

以上、三つの「考え(思惑)」(das Meinen)という語の意義についての自己形成過程の視点を「特別の教科 道徳」と関連づけながら、少しく論述してきた。我々は、自然的意識は、「考え(思惑)」という体系の中にはまり込んでいるということの真意が、自ら真理だと思い込んでいたことであり、真理ではないということに気づかされ、そのことを自覚するに至るということである。児童・生徒たちは、「これが真理である」と把握できたと思った瞬間から、「経験」の道程である自然的意識は、自らの思い込みとその確信が失われたことを自覚するのである。では、自然的意識が思い込みと確信を喪失するということを知覚するという意識の在り方にはどのような性格が隠されているのであろうか。

6. 「経験」の道程、自然的意識と「スケプシス」〔吟味(懷疑)〕

自然的意識はまた、自覚するといった理性的、論理的なものを包摂した意識でもあり、単なる感性的意識とは異なるものである。なぜならば、自然的意識に存するもの(意識の自然的なもの)とは、感性的なもの、すなわち、感性的に知覚され得るものに存するからではなく、「意識にとって直接的に立ち現れ、このように立ち現れるものとして意識に直接的に入り込むところのものに存している」(Heidegger.GA.5.150)からである。意識はそれが意識である限り、吟味することなのであるが、「意識は己れを自らで吟味する」というときのこの吟味することそのことはどういう状態にあるのであろうか。確かに、意識という言葉は、近世的形而上学の基本語として、我々が「意識して- いること(Bewußt-sein)」という言葉に含まれている「存在(いること)sein」の中に吟味という傾向(筋道)を考え合わせるとき、はじめて思索されたことになる(Heidegger.GA.5.173)。自然的意識が、対象についての直接的な知であり、この対象を真理とみなしている場合には、同時に、対象に関する自らの知についての知(Heidegger.GA.5.173)であると言えよう。

「自然的な意識はこのような仕方では、理性的なもの、論理的なものという非感性的なものであれ、精神的なものという超感性的なものであれ、感性的ならざるものをもすべて受け容れるのである」(Heidegger.GA.5.150)。そのために、「経験」の道程としての自然的意識にとっては、真なるものとみなされているものを、間断なく揺り動かすこと、すなわち「疑うこと」という「懷疑」の道程でもある(Heidegger.GA.5.151)。

そこで、我々は、自己形成過程としての意識の「経験」の道程を、「スケプシス」〔吟味(懷疑)〕の観点から捉え直してみる必要がある。「経験」の道程が、吟味(懷疑)の道程でもあるということは、どういうことであろうか。それは、自然的意識には、「スケプシス」(σκέψις)〔吟味(疑い)〕という性格が備わっており、この性格ゆえに自然的意識は、現象知から実在的(真の)知へと高めていくことが可能となるということである(Heidegger.GA.5.152)。もともとのギリシア語の「スケプシス」(σκέψις)には、「見ること」(das Sehen)、「見守ること」(das Zusehen)、「熟視すること」(das Besehen)という意味があった(Heidegger.GA.5.152)。それゆえ、スケプシスは、存在者(存在しているもの das Seiende)が存在者(存在しているもの)として何であり、いかにあるのかということをよくよく見ようとする。自然的意識は、存在者としての対象に真直に関わり、それのもとに留まっているかぎり、また、この対象に関する何らかの存在者としての知に関わり、それのもとに留まっているかぎり、存在者に関する意識、すなわち、存在的意識(das ontische Bewußtsein)と呼ぶことができる(Heidegger.GA.5.175)のである。

この意味で了解されたスケプシスは、「存在者の存在(das Sein des Seienden)を見守りつつ追っていくのであり、その見守りは、存在者の存在をあらかじめ見てしまっている。このような視野からスケプシスは、事柄そのものを熟視する」(Heidegger.GA.5.152)ものとして捉えることができる。このことからわかるように、「経験」の道程としての自然的意識が、スケプシス(吟味〔懷疑])という性格を備えているというのは、我々が、存在者の存在、すなわち、個々の事物や現象ではなく、そのものをものたらしめている本質、真なるものを見守るという態度を備え

ているということである。スケプシス(吟味〔懷疑])という性格を存在者の存在の見守りという態度として理解するならば、道徳科の場合、教師、児童・生徒たちが「真理の探究」という内容項目における真理なるものを認識対象として捉えてはならない。さらに、それに先立って、おぼろげにはあれ、みんなが真なるものの漠然とした存在を見守っていこうとする道徳的な態度というものがまずもって問われなければならないのである。

「スケプシスは、それ自体においても我々の許にある絶対的なものの絶対性は、光線としてすでに我々に触れているが、スケプシスはこの光線の光の中を歩み、またその光の中に立っている」(Heidegger.GA.5.152)。

先述したように、光そのものをどう捉えるのかということは、「経験」の道程としての自然的意識が備えているスケプシスという性格、すなわち、存在そのもの、光そのものの中に立ち、見守っていこうとする態度あるいは構えと切り離して考えることはできないのである。

7. おわりに

ハイデガーが「ヘーゲルの経験概念」のうちに存在者の存在、存在そのものを読み取ろうとする試みは、「経験」の道程としての自然的意識と、スケプシス(吟味・懷疑)のもつ本義としての存在の見守りという態度の在り方にも連動したものであった。存在の見守りと、真理を探究する道徳的態度との相関性については、これから取り組まなければならない研究課題の一つである。本論稿においては、難解なヘーゲル哲学をなるべく平易にかつ具体的に、道徳科の事例と対応させながら、真理を探究する精神を挙げ、その「考え」を深めていくこととしての自己形成に関わる「経験」の道程における自然的意識について、ハイデガーなどのヘーゲルにみる経験概念を基点とした存在論的アプローチによる考察を試みた。自然的意識を端緒とした「経験」についての存在論的思索において重要なのは、スケプシス(吟味〔懷疑])という性格を存在者の存在の見守りにおいて欠くことのできない、存在者(Seiendes)が存在者性(Seiendheit)の一つの独自の本質が、それ自身の中に蔵しているということ(Heidegger.GA.5.175)、そのことを自覚するということである。児童・生徒一人一人が自らの「経験」に照らして、その自らの在り方生き方を考え、議論する際に前提されていることは、第一のこととして、児童・生徒が思索する態度をもつということであり、思索する態度を持てるように誘うということである。

自己形成過程として、学に至っていない意識を学へと手引きするということは、意識の「経験」という、日々学習し「経験」を重ねていくことが、単に事柄に疑問を投げかけるといった姿勢・態度ではないことの自覚を児童・生徒自らに促す「経験」でもある。自然的意識が「考え(思惑)」という体系にはまり込んでいることの肯定的な意味を、考えを深めることに重点を置く「特別の教科 道徳」における真理探究に向かう児童・生徒の意識として取り出すことによって、その「経験」の道程を僅かながらでも捉え直すことができたのではないだろうか。論述してきたように、存在論的探究による、児童・生徒の自己形成を促しうる教育の哲学的考察を遂行することは、児童・生徒の「経験」のプロセスを、「特別の教科 道徳」における内容項目「真理の探究」に向かうことの自覚を深める自己形成過程として捉え直すことであり、道徳教育にとって必要不可欠なことである。

注

- 1) この論稿を進めていくにあたっては、ハイデガーの『杣径』「ヘーゲルの経験概念」、Heidegger, M *Hegels Begriff der Erfahrung, in : Holzwege. Gesamtausgabe Bd.5. Frankfurt am Main* を引用・参照する。以下、本稿中では、GA.5 とし、その後に頁数を記す。なお、邦訳に関しては、ハイデッガー全集『杣径』、茅野良男、ブロッカルト・H. 訳、創文社、1988年を参照した。なお、ハイデガー以外にも、ボンジーベン、フィンク、W.マルクスなどのヘーゲル『精神現象学』における存在論的解釈も参照している。
- 2) 文部科学省(2018)『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編』廣済堂あかつき(株)以下、本稿中では、(小・道2018)とし、その後に頁数を記す。文部科学省(2018)『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編』教育出版(株)以下、本稿中では、(中・道2018)とし、その後に頁数を記す。
- 3) 高橋 勝(2007)「第三章 受苦の経験の人間学」『経験のメタモルフォーゼ』勁草書房においては、ハイデガーによるヘーゲルの経験概念の解釈を自己形成論の視点から試みている。この高橋の自己形成論としての経験概念の解明を、本稿では、さらに深化・発展させる必要があると考え、論を展開してみたい。
- 4) 本論稿では、Das ausfahrende Auslangen という原文に従い、対象に「手をさしのべて、出かけていくこと」ということを「出かけながら手を伸ばすこと」と訳している。
- 5) ハイデガーの論述(GA.5.185)では、意識の真理として提示されている言葉が、自己の生活地平そのものとして捉え直されているが、このことは、ハイデガーの現存在の地平から読み返されたものとして、自己形成論に新たな息吹を吹き込むものとして意味をもたらしていると言えるであろう。
- 6) Herausgegeben von Pöggeler, O(1977) *Hegel : IV. Phänomenologie des Geistes* Von Wolfgang Bonsiepen. Freiburg/München. 以下、本稿中では、Bonsiepen. 1977とし、その後に頁数を記す。ハイデガー研究の第一人者のひとりでもあるO.ペゲラー編、第四章『精神現象学』執筆担当のW.ボンジーベンのこの著作では、「精神現象学 緒論」の部分に着目し、ハイデガーのヘーゲル解釈と並んで、自己形成過程に示唆を与えるものとして引用・参照している。なお、邦訳に関しては、O.ペゲラー編『ヘーゲルの全体像』谷嶋喬四郎監訳、以文社、1988年を参照した。
- 7) 真理に向かう共通の意識としての間主観性として響き合うということ、また、共鳴し合うことなどについては、他者と自己との開示性としての共通感覚論に着目する必要がある。このことについては、大橋良介『感性の精神現象学 ヘーゲルと悲の現象論』創文社、2009年に詳しい。特に、本稿では、「第一部 ヘーゲル『精神現象学』における『感性』の射程」を参照した。
- 8) W.ボンジーベンの『精神現象学』の解釈に従うならば、「我々」は、叙述あるいは標示(Darstellung)する者である哲学者ヘーゲルを指すが、フィンクの場合は、ヘーゲルと彼に共鳴する読者を指すであろうが、本稿では、道徳を教える者として、ヘーゲルの『精神現象学』における弁証法的思考が必要であるという見解から、場面によっては、「我々」を、例えば、『精神現象学』にみる自己形成の物語的な思考を含む哲学の知をヘーゲルの叙述とともに追隨する者としての教師と、彼に共鳴する児童・生徒という、捉え方で論を展開している。Fink, E(1977) *Hegel, Phänomenologische Interpretation der Phänomenologie des Geistes*, Frankfurt a.M. 以下、本稿中では、Fink. 1977 とし、その後に頁数を記す。
- 9) ヘーゲル『精神現象学』においては、Hegel ,G.W.F *Phänomenologie des Geistes*, hrsg.v.G.Lasson, Leipzig1927を用いた榎山欣四郎訳『新装版・世界の大思想1 ヘーゲル 精神現象学』を引用・参照した。以下、本稿中では、Ph.1927とし、その後に頁数を記す。榎山欣四郎(1961)『ヘーゲル精神現象学の研究』創文社。本書は、特に、ハイデガーの存在論的考察からヘーゲル『精神現象学』「緒論」の見解を詳述している。そこで、本稿では、その見解と自己形成過程とが関連していると思われる内容について引用・参照している。以下、本稿中では、榎山1961とし、その後に頁数を記す。
- 10) Marx, W *Hegels Phänomenologie des Geistes : Die Bestimmung ihrer Idee in „Vorrede“ und „Einleitung“*, 3Auflage, Frankfurt a.M. 以下、本稿中では、W.Marx2006 とし、その後に頁数を記す。
- 11) ここでの「志向性」という概念については、意識が対象を志向することに注目したならば、フッサール現象学の志向性の視点のみならず、ヘーゲルの「現象学」にも共通しているものとして解釈している。この点に関しては、前述したオイゲン・フィンクのヘーゲル解釈などを参考になり得るものとして挙げることで

きる。

引用・参考文献

- 1) Heidegger, M (2003) *Hegels Begriff der Erfahrung, in : Holzwege. Gesamtausgabe Bd.5.* Frankfurt am Main
- 2) Herausgegeben von Pöggeler, O (1977) *Hegel : IV. Phänomenologie des Geistes* Von Wolfgang Bonsiepen. Freiburg/München
- 3) Hegel, G.W.F (1927) *Phänomenologie des Geistes*, hrsg.v.G.Lasson, Leipzig
- 4) Fink, E (1977) *Hegel, Phänomenologische Interpretation der Phänomenologie des Geistes*, Frankfurt a.M.
- 5) Marx, W (2006) *Hegels Phänomenologie des Geistes : Die Bestimmung ihrer Idee in „Vorrede“ und „Einleitung“*, 3Auflage, Frankfurt a.M.
- 6) ヘーゲル(1973) 樫山欣四郎訳『新装版・世界の大思想1 精神現象学』
- 7) 文部科学省(2018)『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編』廣済堂あかつき(株)
- 8) 文部科学省(2018)『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編』教育出版(株)
- 9) 高橋 勝(2007)『経験のメタモルフォーゼ』勁草書房
- 10) 樫山欣四郎(1961)『ヘーゲル精神現象学の研究』創文社
- 11) 西 研(1995)『ヘーゲル・大人のなりかた』日本放送出版協会
- 12) 大橋良介(2009)『感性の精神現象学 ヘーゲルと悲の現象論』創文社
- 13) 寄川条路(2006)『ヘーゲル『精神現象学』を読む』世界思想社

Keywords : 自己形成, 経験, 自然的意識, ヘーゲル, ハイデガー